

2026年を希望ある年に

2026年新年のご挨拶を申し上げます。

わたしの家では、諸事情から賀状による新年のご挨拶を今年から遠慮させていただいています。悪しからずご了承くださいますようお願ひいたします。

さて、私達夫婦は昨年末に妻の生まれ故郷＝小豆島＝に夫婦旅行・登山を行いました。その顛末を「新・山と花のたより」302号に記していますのでご覧ください。その302号の最後の記事に「忠に『認知症』との診断が下された」事を書きました。そしてそのことで何人の方から励ましのメールをいただき、感謝の念でいっぱいです。

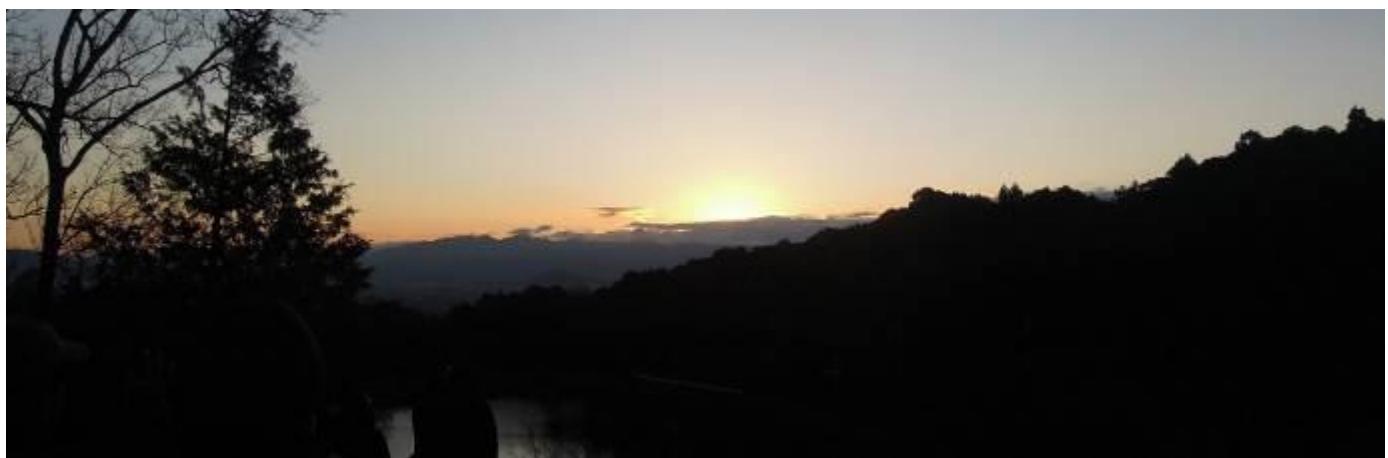
おかげさまで私・松尾忠も「認知症とうまく付き合い、人生の最晩年を悔いなく生きよう」との気持ちを持つことができました。励ましてくださった方々に心から御礼申し上げます。

あなた様とご家族皆様のご多幸、ご健康を念じております。

2026年1月



↓音羽三山から昇る初日の出(二上山中腹で 2026年元旦)



今年も初日の出は二上山で

寒風について登山口に

元旦、早朝起床。新聞を取り込みながら空を仰いで晴れを確信し、登山の準備にかかる。恒例としている二上山での初日の出を見るためだ。寒さに備えてランニングシャツの上から長袖シャツを重ね、オーバーアルボンを履いてバイクを走らせた。二上山の奈良県側登山口の一つ・初田川公苑に着いた頃には空は白みかけていたが、二上山は黒々と静まり返っていた。

悲劇のヒーロー・大津の皇子の真墓の前で

時間がないので途中で日の出を迎えようと、鳥谷口古墳への階段をゆっくりと昇った。この古墳は1983年に見つかった方墳で、考古学者の中でも「大津皇子(おおつのみこ)の真墓ではないか」と言われているもの。



「判官(ほうがん)びいき」は昔から?

天武天皇の第3皇子だった大津皇子は皇位継承争いに巻き込まれて自刃させられた。非業の死を遂げた大津皇子には人々の同情が集まり、そ

のせいか政権側は皇子の墓を二上山に移して作り直した。今でも二上山雄岳山頂東に「大津皇子墓所」があるが、この鳥谷口古墳が発見されて以来、「こちらが大津皇子の真の墓だ」との説が有力となっている。理由・根拠についてはもうもあるが、紙面・字数の関係もあり、此処では省かせていただきたい。

皇子の死が西暦686年だから、源義経の死(1189年)よりも500年以上も前なのだが、「判官びいき」(義経の官職・判



官(はんがん、ほうがん)から、義経に同情する傾向を“判官贔屓(ほうがんびいき)”と呼ぶようになり、さらに「弱者に対する同情や贔屓」(広辞苑)を指す言葉となった)は古来日本人の心情なのか。

いや、この大津皇子を巡る物語も、後年の人人が判官びいきの日本人の心情に訴える形で脚色したのかもしれない。

家も畠も池も森も赤く染めて元旦の太陽が昇る

さて、話を元日早朝に戻そう。

古墳の前の石段に座っていた女性が「あそこがよく見えるそうですよ」と古墳墳丘の上を指して薦めてくれた。そこには数人の若者たちが声高に話し合いながら日の出を待っていた。

墓の被葬者が誰であろうとその墳墓の上に土足で上るのはどうかと思い、横にある石に腰掛けで待つことにした。

眼下には「當麻大池」の湖面が見え、そこに水鳥達が泳いでいる。その向こうには大和盆地の南部(中和地域)が広がり、さらにその向こうに榛原山地や音羽三山の峰々が聳えている。視界に入るすべてのものが黒々と見える中で音羽三山の上空が白みはじめ、やがて赤く染まり始めた。若者たちの声が大きくなり、カウントダウンが始まった。その声が歓声に変わった時、音羽三山にかかる雲の上から、太陽が姿を現した。

モノクロだったすべてのものが本来の色彩を取り戻していく。公苑のシダレヤナギがフレッシュグリーンの枝葉をなびかせ、下草も萌葱色の絨毯になっていく。

新春の気合を入れなおして、山を下った。

静かに春を待つ月ヶ瀬の里

私は長年「山と花のたより」というホームページを作成しており、毎月 15 日が更新日なのだが、1 月は題材・記事を思いつかず、思い立って奈良市月ヶ瀬の梅を見にでかけた。

「またドロナワーー」と眉をしかめる妻。その妻運転の車で 9 時出発。西名阪道～名阪国道を休みなく走って 11 時過ぎ「月ヶ瀬梅の資料館」に到着。

あいにく「資料館」は休館日、やむなく「行政センター」の駐車場に車を停めて、梅林のある集落への道に踏み出す。

すぐに道路わきの民家の壁に「日本共産党掲示板」を発見。

田村智子委員長のポスターの下に「赤旗無人販売箱」が設置されている。中身を見た妻が「今日付けの日刊紙が入っているよ」と驚き、感動。

党掲示板と「赤旗無人販売箱」に励まして、急坂の道を進む。坂道のコンクリート舗装は滑り止めのためか細い溝が刻まれたり、小石が埋め込まれていて、路面は凹凸に富んでいる。その凹部にトングリなどが転がっている。

ムクロジ(無患子)の実

「あれ！、これドングリじゃないよ」と妻の声。妻が拾い上げた球果は一円玉くらいの大きさで柔らかい果肉に包まれている。確かにドングリではない。「これはムクロジだ。昔の人は石鹼替わりに使ったらしい。中にある種子は羽根つきの羽根の材料にもされたのだ」と聞きかじりの説明をすると、よほど珍しかったのか袋の中にしまい込んだ。

ムクロジはムクロジ科ムクロジ属の落葉高木、東南アジアやインド原産。日本では主に西日本の社寺などに植えられた。「無患子の実」は秋の季語。「無患子降る寺を高所に明日香村」(松崎鉄之助)

ウメはつぼみを膨らませ、ロウバイ、スイセンが香る

誰も出ていない静かな村の道を進む。民家の庭にも沿道にもウメ、ロウバイ、スイセン、サザンカなどが見栄えよく植えられている。さすがは名にしおうウメの名勝地。遊歩道、展望所、棧敷などがしつられており、開花を待つばかりの風情だが、如何せん花は鑑賞に堪えられる状況ではない。梅はつぼみを膨らませているが、開花はまだ、スイセン、ロウバイ、サザンカなどの香りの中をゆっくり歩いた。

この山里まで「赤旗」を届ける皆さんに感謝し、迎春の雰囲気を満喫させてくれた花々にお礼を言いつつ帰宅。

